

## 平成 29 年度「世界エイズデー」キャンペーンテーマフォーラム報告 「一緒にテーマを考えよう」

2017 年 5 月 20 日（土）17:00～18:30 コミュニティセンター akta 出席者 10 名

- 開会あいさつ、趣旨・策定プロセスの説明（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）
  - ・世界エイズデー国内啓発キャンペーンのテーマは平成 22 年度以降、現場に近いところから候補案を策定する方法を探ってきた。API-Net の意見公募とフォーラムを通じ、どんなメッセージが必要なのかを検討している。6 月の検討会議を経て 1～2 案をエイズ予防財団から厚生労働省に提案したい。
- 地方自治体のキャンペーンテーマ使用状況について説明（同財団 堀内由紀）
  - ・昨年度テーマ「知っていても、分かっていても AIDS IS NOT OVER」の使用状況について 142 自治体に調査した（資料 1）。昨年 7 月のテーマ決定以降～本年 1 月までに、全体の 69%にあたる 98 自治体がテーマを使用していた。使用方法は、啓発資材への盛り込み、HP への掲載・リンク、授業・講演会等での説明、パネル展示、ラジオ・新聞・イベント会場での紹介等である。使いやすさについても回答を得た。使いやすかった理由として「感染予防には行動が大事だということが暗に伝わる。語呂も良い」「3 年続けて AIDS IS NOT OVER という文言が入り、啓発活動に使用しやすかった」「考えさせるテーマで、啓発に効果的と感じた」等が挙げられた。

### ディスカッション

- 司会・進行（特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 長谷川博史理事）
  - ・キャンペーンでは、同一テーマを 3 年程度使用しないと浸透しない。それを踏まえて話し合いたい。会合を開くと、都市部より地方のほうが動員率の高いことがある。地方で孤立している人への支援も大切だ。「AIDS IS NOT OVER」はむしろ地方で共感が高かった可能性もある。
- 参加者からは以下のような意見が出された。

#### 《3 年間使用した「AIDS IS NOT OVER」に対する感想》

- ・予防啓発について、新宿エリアは施策が打たれているように思うが、新橋や上野エリアは十分だろうか。効果検証し、訴求効果を見込んだ上で対策を打ってほしい。  
→上野・浅草などはむしろ地方型アプローチが必要なのではないか。
- ・行政では「AIDS IS NOT OVER」が意識して使用されている印象だった。AIDS のワードが入り、シンポジウムやイベントで使いやすかった。若い世代には「エイズはまだ終わっていない」の「まだ」のニュアンスがわからない人もいたようだ。
- ・シンポジウム等でテーマが掲示されることもあるが、ゲイバー等では掲示されていない。意外とコミュニティにテーマが届いていないかもしれない。
- ・近年は HIV 陽性と分かっても、ウェブサイトで情報を入手し治療にアクセスできる。一方、陽性者団体に相談に来る人はパニック状態のことがある。HIV に加え他の問題を抱えていることが多い。多くは自発的検査ではなく、病院で陽性が判明している。混乱の仕方は年齢層で異なり、若い層はエイズをよく知らず、陽性の先が見えていない。40 代以上は死のイメージが強くパニックに陥る。
- ・欧米のエンタメに関心のある人は早くから PrEP の存在を知っている。自分の周りでは、PrEP に関心は高いが、服用したいという人はまだいない。  
→梅毒の流行を感じている。PrEP は他の性感染症に有効ではない。

→「検査を受けているから、予防しなくてだいじょうぶ」という人がいるが、そのうちに「PrEPをしているから、だいじょうぶ」という人が出てくるだろう。

- ・エイズが身近な層と身近ではない層で意識のギャップがある。双方に響くテーマの設定は難しいが、AIDS IS NOT OVER はある程度、実現できたのではないか。
- ・エイズは怖いというイメージがあったが、その後エイズ対策に関わるにつれ、AIDS IS NOT OVER を実感し、良いテーマだと感じている。以前は、何が NOT OVER なのか疑問に思った。
- ・コミュニティですでに使っているメッセージでも、了承が得られれば活用したい。コミュニティとも連動できる。HIV/エイズ対策に関わるすべての人が関心を持てるテーマにしたい。

### 《テーマのあり方や方向性について》

- ・男女の恋愛を前提にしたものや耳あたりのよいテーマは、キーポピュレーションへの配慮が欠けがちで、バランスが難しい。「恋愛の数だけ HIV を語ろう」は双方から賛同できるテーマだった。
  - 予防啓発は大切だが、ともすると陽性者を排除するようなメッセージになりやすい。
  - AIDS IS NOT OVER は、エイズはもういいだろうという楽観視に対する警告でもある。
  - 楽観と恐怖、両方の問題がある。予防には楽観、支援にはスティグマの問題がついてくる。
  - 若い層向けの調査では、受検しない理由の2~3割が恐怖だった。身近にいないので自分はだいじょうぶという楽観もある。二極化している。楽観は無意識の恐怖かもしれない。
  - 気を付けていたのにまさか自分が、というケースもある。
  - オリンピックに備えた外国語対応は大切だ。
- ・過去のテーマでは「恋愛の数だけ HIV を語ろう」が心に響いた。他は複雑すぎる気がする。もう少しだけ感じた感じでもよいのではないか。
  - セックスと HIV について語る機会がほしい。一夜限りのセックスもあるので、「恋愛の数だけ HIV を語ろう」だと少し引かかる。LGBT という言葉で人権が語りやすくなった。但しセックスと HIV の問題は置き去りにされてしまう。
  - HIV の問題は愛だけではないが、「恋愛の数だけ」というと伝わりやすい。エイズのこと知っているよね？とするのか。あるいはリアルなことを伝えるのか。
  - セックスという言葉を出すと漏れる部分もある。目を背ける人も出てくる。情報をアップデートしようという呼びかけはどうか。エイズの問題は変化していて進行形である、久しぶりの話題かもしれないが目を向けてみないか、というアプローチはどうか。
  - テーマが説明的だと関心のない人には残らない。インパクトがあれば認知度が上がる。綺麗な言葉は食いつきやすいが、意識として残らない。一般向け予防啓発の反動としてマニアックなものが出てくる面もある。
  - HIV に纏わるイメージを変えるには差別・偏見のある現状を変えないといけない。その一つが情報をアップデートすることだと思う。そして自分のこととして受けとめること。
  - 最近陽性がわかった人が複数おり、相談される機会がある。
  - 都市部と人口の少ない地域に共通したブリッジをかけるのは難しい。知識のない人も引きつけられるテーマにしたい。セックス以外のリアリティ（職場や介護現場等）も増えているので、何か普遍性のあるメッセージを出せたらよいと思う。
  - メインテーマを設け、その下に的を絞ったキーワードやトピックス、コピー等をつけたポスターを作ってもよいだろう。
  - AIDS IS NOT OVER は3年採用し、サブタイトルを毎年変えてきた。今年から新たなメインテーマを設定し、サブタイトルを一般向け・トランス向け・ゲイ向け等と変化させ、提示していくのも一案かもしれない。3年単位で考えれば可能だ。

### ■閉会あいさつ（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

本日の意見を踏まえ、検討会議では3年程度かけて浸透できるメッセージを探りたい。エイズ予防情報ネットでは6月5日（月）まで意見を募集しているので、フォーラムに出席した人も、出席できなかった人も積極的に投稿してほしい。宛先は [theme@jfap.or.jp](mailto:theme@jfap.or.jp) 。